

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分  
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時  
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/  
午前 11時40分～午後 1時30分  
電話 56-0303 (直通)  
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の  
教頭先生へご連絡をお願いします。

## 夢物語 〈全4話中の第1話〉

# 北佐久郡川西が輩出した俊傑二人

しゅんげつ  
いちず  
～教育一途の人・五無齋と現代書道の父・天来～

立科町教育相談員 岩上起美男

平成25年2月14日、佐久地方は記録的な豪雪に見舞われました。

その日、降りしきる雪の中、「広報たてしな」に載せる蓼科高校体育館の扁額「蓼科学校」の写真撮影に同行しました。

長野県が輩出した初の大蔵、渡辺国武子爵(1846～1919)の揮毫による威風堂々とした大額面を仰ぎ見ますと、百年余の時を超えて、五無齋・保科百助先生(1868～1911)の無垢なる教育的情熱がひしひしと伝わってくるのを感じ、知らず背筋が凍と正されました。

折しも体育館内は、生徒会長の指揮の下、1年生の朗々とした男声と美しく澄んだ女声が爽やかに響き合っていました。その歌声を耳にしながら、扁額を仰視していますと、何とはなく五無齋先生が扁額の陰で蓼高生の清々しい合唱に嬉しうに聴き入っておられるような気がして、老生の空想は、三石勝五郎翁の詩「蓼科学校揮毫」の世界へ飛んでいきました。しばし、老いの夢物語にお付き合いくださいますよう……。

明治40年2月の或る日、五無齋が、東京、麻布の渡辺国武子爵邸を訪れた。

渡辺国武は、第2次伊藤博文内閣の大蔵大臣及び通信大臣、さらに、第4次伊藤博文内閣の大蔵大臣を歴任し、政界引退

の後、麻布の自邸で静謐な日々を過ごしていた。

応接に出た書生が、山羊髭をたくわえ、紺の法被に草履履きの五無齋を一瞥して、居丈高に言った。

「渡辺国武先生に何の用だ？」血気盛んな書生は、五無齋を無頼の物乞いと勘違いしたらしい。

「俺を知らぬか。大馬鹿者め！」五無齋が書生を一喝した。すると、子爵の身辺警護の任も仰せつかつている腕に覚えの書生が、何だ！と腕まくりした。

ちようどそこへ子爵が顔を出し、満面の笑みで、「保科君、遠路よく来てくださった。さあさ、お上がりなさい。」と歓迎した。突然の来訪にもかかわらず、前もって約束を交わし、五無齋の来宅を待ち侘びていたかのような子爵であった。挨拶もそこそこに草履を脱ぎ、玄関に上がった五無齋を、子爵自ら客間に案内した。書生は、腕をまくり上げたまま目を白黒させ、主と豪壮な子爵邸におよそ似つかわしくない風体の来客が客間に入るのを見送った。

客間は8畳の瀟洒な和室だった。黒檀の床の間に、「堅忍不拔」と墨痕鮮やかに認められた掛け軸があった。明治維新の三傑と称され、明治政府の創設に参画した大久保利通の書である。大久保は、京都御所の警備の任に当

っていた若き渡辺国武と出会い、渡辺の職務に対する謹厳な姿勢に感心し、中央政界に登用した人物である。

五無齋は座に着くや、訪問の用件を切り出した。

「まことに恐縮ですが、大臣に揮毫を二点お願いしたいのです。」

相手が誰であろうと、遠慮のない物言いをする五無齋が、このような丁寧な言葉遣いをするのは、渡辺子爵が20歳以上年輩であるからとか、大物政治家であるからとかの常識によるものではない。古来、類は友を呼び、類をもって集まるというが、傑物と傑物が以心伝心、傑物であるが故に抱き合う畏敬の念がもたらしたごく自然な言葉である。

「一点は、この6月、開館の式を迎える運びの信濃教育会付属図書館(現県立長野図書館)の閲覧室に掲げる扁額の揮毫です。もう一点は、蓼科農学校の講堂の大扁額です。私が在職のころから、蓼科農学校には講堂がありません。この点につきましては、いつぞや大臣から承った欧米諸国の学校事情とは大きな差があります。その歴史とした差は、失礼ながら、互いに反目し、独自の判断で行動する我等が陸軍、海軍の間にある千尋の谷に等しいかと存じます。予算が回らぬ事もありますが、やはり寺子屋教育の名残と申すべきなのでしょう。遅々